

転生したらレインボー部隊になった件

musashisan

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある人気者が不慮の交通事故で死んでしまう。しかし何故かうまれ変わり。この世界は……

複数の特殊部隊員が繰り広げる異世界(?)物語

尚これはフィクションです。

## 目次

Tの章	
転生したらレインボー部隊になった件	1
Fの章	
転生したらレインボー部隊になった件	4
Kの章	
転生したらレインボー部隊になった件	7
Mの章	
転生したらレインボー部隊になった件	9
Lの章	
転生したらレインボー部隊になった件	11

## Tの章

### 転生したらレインボー部隊になってた件

俺はアレクサンドル・ロナファイエフ。普通の高校生で、ちよつと言えば、皆からの人気者だ。学力は外国語、体育などが得意で、もうすぐ人気者コンテストがある。その最有力候補が俺だ。だがある日俺が信号で待っていたら、突然目の前に人の姿があった。何故か俺は身体が勝手に動いた。自殺行為なんてわかってたはずだ、なのに何故俺はこんなことをしてしまったのだろう。気がつくところには、赤い液体、ぼーとする一般人、悲鳴をあげる人、車からでてくる人、そんな中意識が遠のく俺……そんなことがあった。

いま考えれば良いことをしたと思うけど、すまん我が同志達よ。最初は悪夢でも見たのかと思うくらい感覚で、目を覚ましたら違う世界にいたことで死んだという実感を得た。どうやらこの世界はおれの知っているせかいと似ているが違う所だ。この世界は戦争中で、おれはロシアにいるようだ。これは日本で見た小説の内容と似ている。偶然か俺の親の故郷でもあったし、民族も聞いたことがあった“セナファイエフ一族”こんなことはあるのか、そう思った。だがそこに疑問を抱かなかつた。何せ驚くことが多すぎるから、感覚がおかしくなっている。ちよつとやそつとのことではもう驚かないとまでの自信もある。

それはそうと今俺は赤軍にいる。幸運なことに俺が入隊した時に敵国はもう退いていた。軍の召集が解除され、俺は専任の軍役を選択した。主にブリーチング、防衛において訓練している。それと精密工具や金型などにも手をいれている。その後は海軍を志願したが、機密扱いされていたせいで武装部隊に残った。

とまあどんどん時が流れてしまったが、そこから俺の真の人生だったことには、まだ気づいていない。

set! leady! fire!!!ドドドドドという轟音と共にカランカランと落ちる空の弾、砕ける壁の音、熱くなる銃口、やめ

の合図でさつきまでのことがなかったような静けさ、今は俺が開発した機銃を試しうちしてたのだ。「これはかなりののできだな」「そのままこっちの武器にいれるのも悪くない」と称賛の嵐。そうだ俺が作ったこの機銃は何年もの歳月を経て完成したのだ。今の俺の部隊は、レインボー部隊という対テロ組織部隊にいる。

だがこの称賛は、後に撤回されてしまった。

「よう、アレクサンドルお前またなにもできなかつたんだって?」「こいつはセバステイアン・コア攻撃側の人間だ、いつも床や天井を壊しては俺の居場所をなくしてくる。

「ああ今日もダメだったよ今日の活躍は壊して終わりだったからな。ずっと観てたもんな」そう言うのと当然相手も反論してくる。

「どこのナメクジとはちがうけどな」  
「やめな」

そう言い二人の喧嘩を止めたのはイライザー・コーエンだ彼女は結構な人気があり勿論実力も上の位に立つ。

二人は普段喧嘩をするような中ではないが、戦績の話しとなるとまた別のことだ。コーエンのおかげで何事もなく終わった。

俺は強くないのは重々承知しているだがそれを馬鹿にするのはプライドとして許さない。元から才能があるものが恵まれ、その中のさらに絞り出された者が生き残る。努力ではなにも報われないだがこの努力も一部の才能かも知れない。そうおもって俺はこの日々を過ごしてきた。やっぱり結果は表れず最下位という所をさ迷い続けている。

その夜いつもの日課のトレーニングを始めた、勿論もう歳で衰えるばかりだが俺は続ける。どうしても皆に一矢報いたいその思いで今もなお続けている。計画をたて、訓練し、落胆し、それでも俺はこの部隊を続けていくつもりだ。皆と分かち合い、協力し、戦い俺たちの戦いはまだ始まったばかりである。

アレクサンドル・ロナフイエフ

T A C H A N K A

11月3日誕生

ロシア育ち

身長183cm

体重99.8kg

固有技能 固定機銃 自らつくりメンテナンスし、古いものを使用している。

## Fの章

### 転生したらレインボー部隊になってた件

私は、ティナ・リン・ツァン早くに親を亡くし、現在は、親戚の人と暮らしている。

部活は文化部で、部長を努めている。クラスからは一目置かれていて成績は、学年、歴代一位優等生だ。几帳面な部分があり、それはものすごいらしい。

ついに待ちに待った修学旅行でカナダへ行くことになった。私の故郷ださすがの私も楽しみで、夜しか眠れなかった。ついに到着かとおもったら急に機体が地面の方へ向かい、気がついたら周りは赤オレングジというべきか、そのような炎が舞い、焼けた機体、火柱が目に入った。

そこで記憶は、消えていた。

目を覚ますと、そこには海、後ろには森、自分の経験上ここは無人の島ようだ。何故か傷はなく、すんなりと立てたあれだけの衝撃があつたにも関わらず無傷とは奇跡を越えたなにかだ。でもなにかがおかしい、それはすぐにわかった。そう、墜落したであろう機体がないのだ。堕ちた跡もなく、火もない、さっきの出来事が夢のようだった。いやこれが夢なのかもしれない。とにかく私は生き延びるべくあちこちを歩き回った。サバイバルはなれている。子供ころ体験してたからだ。

それから一週間が経った体感は何ヶ月にも及んでたかんじだ。そしてこの話しは、あまりしないようにしている。

あとから気づいたことだが私はどうやら、違う世界に来ていたようだ。

数年後私はカナダの大学で、勉強し、主席で卒業した。

18の誕生日に私は空軍に入った。どうやら私が生きてた前の過去を生きているらしい。その後学士号を取得し、士官訓練を終えた後、探索救助部隊の一員として活動していた。今もなおアウトドアは

パラシュートやらを楽しんでいる。機械工学を専攻してたこともあり、トラップ（ウェルカムマット）を改良し、シンプルで隠密度の高いものをつくれた。集中力と粘り強さは負けない自信はあった。

そして現在は、レインボー部隊に入っていて、防衛に参加している。私のつくったトラップは、飛び越えるところに置くと強く、前は海岸線とここで優秀な人でさえとらえて見せた。

私は入隊したとき個性が部隊の中で数少ない人材といわれ、その中の二人のサナー・エル・マクトーブとタイナ・ペレイラと仲が良い。そのなかでもサナーとは、サバイバルを経験したことがある人でもあるし、アウトドアでも共通点がある。周りからは野生という言葉が当てはまるといわれる。全く失礼だ。

「私はこの山を登りたいとおもっているよ」

「この山も中々手応えがありそうだ」

「いやそれより、サバイバルも悪くはないだろう」

そう極普通の会話をしているだけだ。

実戦でも私は獲物を捕らえられる自信がある。

その自信は長年研究し、試し、失敗した数があるからである。前の失敗を再び繰り返さないように私はこれからも挑戦する。

ティナ・リン・ツアン

FROST

固有技能 ウェルカムマット

5月4日生誕

出身カナダ

身長172cm



体重 58 kg

## Kの章

### 転生したらレインボー部隊になってた件

俺はマクシム・バスーダ。高校生だ。運動は得意な分類に入り、そのせいかな両親と教師から警官を勧められている。その影響で将来は警官になろうと思う。好きなことは自然とふれあうことで、ハンターという夢もある。学校に登校し、朝の時間が終わった後、男と考える人の叫びでやけに教室が静かになった。テロだ。俺はそれをすぐに気づいた。そのせいか不意打ちで奇襲を仕掛けた。我ながら冴えていると思ってしまった。だが一つ疑問点があった

普通一人でくるのか

そう考えた時、

後ろからなにかが刺さった。

目が、眩む、視線が下がる、体温が下がるのが分かる。何故この事を考えなかったのか俺でも驚く。

「あああ もうだめか、」

そう思った、、

おい いろ おい

「おい起きろ 立て！」

ぱっと目が覚めた さっきのはなんだったのだ いやこれがなんなのか気づけば警官の服を着ていた。なんだ なぜ、

そう思つてぼーとしていたら

「おい次の訓練いくぞ！」

どうやら今はロシアの内務省にいるようだ。俺の勘がそういつている。というか今しゃべっているのはロシア語だ。勘があつたというのか次の訓練は迅速な追跡だ。さっきのは護衛の訓練の途中だったらしい。頭を打ったとか。その後人質の救出や、情報収集などをやった。まる2日だ。

しばらくして、俺は巧みな戦術眼や高い自己完結能力がよかつたら

しく、港町で潜入捜査を任された。結果は素晴らしいものとなり、組織の壊滅への貢献を果たした。

その後そのお陰でスペツナズへ入隊することができた。もはや警官の域を越している。訓練は北極圏で罾を専門にした。そのご転属をした。

そして現在レインボー部隊という対テロリスト部隊に入隊した。理由は簡単だ。俺をここまでにさせたあのやつらに復讐したいと誓ったからだ。真のハンターの恐ろしさをあいつらにもみせてやる。皆からは、俺を過激派と呼んでいるらしいが評価はいい方ばかりだ。

自分は正直この仕事にはうんざりしている。それは自分の任務をうまくこなしていないからだ。熊や狼は仕事を上手くこなすだろう。動物の類時点や相違点をりかいすることですべてを人間に当てはめることができるつまり、応用できるということだ。

狼は家族に忠実だ。

群れの全員で子を育て、狩りの時はチームとして共闘する。人生は厳しいものであり、より厳しいものに行っているのが人間だ。

マクシム・バスターダ

K A P K A N

固有技能 ブービートラップ

5月14日

ロシア育ち

180cm

86kg

## Mの章

### 転生したらレインボー部隊になつてた件

俺は、ジル・トゥーレ。人を守るのが使命と感じているこの頃だ。学校生活は、外国語が苦手ですれ以外は真ん中あたりだ。身長がでかく、クラスでは後ろの方だ。とても威圧的な目で見られていると思われているのが、玉に瑕だ。ある時、四時限目の体育をやっていたとき、えらくだるいせいか、不慮の事故で命を落としてしまった。

そんな夢を見ていた気がした。あれは本当に夢だったのだろうか。酷く現実味があった。

今はフランス国家憲兵隊の警察官として法務執行機関でのキャリアをスタートさせた。見た目のせいか、警察の威厳を示すのに効果的と言われ、群衆の統制や軍事的・対テロ巡視任務に重点を置く機動憲兵隊の一員として動いている。

そして数年後

幅広く訓練をしていたお陰で、G I G Nに。突入を主に得意分野として、工兵や偵察隊としての訓練も受けている。そしてレインボー部隊というところにも所属していた。主にこちらで活動しているが、仕事がないときは、G I G Nで訓練を指導している。

周りからは口数が少ない奴に見られているが、そんなことはないとても社交的だ。

おれが、仕事へいく時装備するのは盾で、拡張をすることによって全身や仲間を守ることができる。その盾は古く、傷が目立つが、俺はこれを勲章と呼んでいる。古いせいか、前に盾を突き破ったこともあった。周りからは同期ズレという他国の言葉を聞いたことがある。何故かその国の言葉を理解することができたのはわからない。時に一人で行動をすることもある。一人とは何故か共感をもてるひとが多そうな気がするのはいのせいだろうか。近接戦闘は得意で、最近盾越しからの銃を撃つとき歳のせいか精度が悪くなってきてる。

新兵たちの訓練を教えるとき、外国語が苦手なせいもあってコミュ

ニケーションをとれないひともある。もつと勉強をしろと勧められるがその気は全くない。

それと、同じレインボー部隊でサイフ・アル・ハデイドという男がいる。彼はまさに力 is powerという男で俺は、あの怪力で吹っ飛ばされるのが多々ある。そんなことができてしまったら盾の必要性や意味がよくわからなくなってしまう。人をあまり信用しない彼は私とも共感を持ってないであろう。

もう一人エアリス・ケッツという同じ盾を使う人がいる。彼は性格は陽気だが周りからは「くだらない」といわれている。彼との仲は同じ装備を扱うこともあるせいかな、お互い信頼と、競争心を持って行動している。

これからも自分の背より高い壁にぶつかれることもあるが、それを乗り越え、到達したその先の景色を期待して今日も傷を負っている。

ジル・トウーレ

M o t a g n e

固有技能 拡張型シールド

10月11日生誕

フランス育ち

身長 190cm

体重 100kg

## Lの章

### 転生したらレインボー部隊になってた件

俺はオリヴィエ・フラマン転校生だ。好きな勉学は、細菌学、ウイルス学、ベクトル制御だ。特にベクトル制御にはすごい魅了を感じている。だが転校生と違って特別な存在ではない。問題を起こし退学になりかけ別のところへといったのだ。周りからは不甲斐な目で見られ、あまり関わろうとしない。ある日の授業中先生からの注意を受けそれでも直らなかつたとき、流星に何回、何十回も受けていたせいか、退学となつた。やばかつたせいか病院いきまでされた。親からはもうみてられないと捨てられ、飯もくえず、そのままのたれ死んだ。最初は苦しかつたが、次第と楽になつた、

目を覚ますとそこは日本ではない何処かへといった。幼い頃の記憶が甦る。此処はフランスのようだ。どうやらこの世界でも親に見捨てられたようだ。

危うくホームレスになりかけたところ、フランス軍に入隊した。早くもCBRNの訓練で適正をみせた俺はより高度な訓練の複雑な科学構造と厳しい規律で、より能力に磨きをかけた。

少しした後には第2竜騎士連隊の一員となり、主に環境監視センターを扱つた。

また少しした後には俺は自信の才能を活かすことができなれないと思ひ、軍を辞め、GIGNの作戦支援部隊への加入を決意し、国家憲兵隊に入った。この訓練はとりわけきつかつたがそれでもめげずに頑張つた結果、レインボー部隊という対テロリスト部隊に推薦された。

俺は傷ついた心を癒すためにも訓練を行っている。苛立つこともあるがそれを集中力に変えて行っている。

俺はカトリックにはいっていて、過去のことは忘れたりはしないが、それでも執着もしない。この後悔を原動力に変えて今も生きてる。

息子を愛しており、過去の俺の惨状になってほしくないため愛して

いるということもあるだろう。

エマニユエル・ピジョンとは仲がよく空中ドローンを提供してもらったのは彼女だ。敵が動くだけで赤く見え凄く便利だったが、まだプロトタイプのせいか、いつの間にか赤いピンのようなものしか見えない。しかも情報量が少ない。使いすぎたせいなのかはよくわからない。

ギユスターヴ・カテブとは過去の悲劇のせいで仲がよくない。あの惨劇は仲間を守るために人を殺める覚悟をしたきっかけにもなっているくらいに恨まれている。

俺はこの生まれ変わったお陰で全てが生まれ変わったと感謝している。新しい仲間との出会いや別れ、辛いことも楽しいことも、全てこの出来事のおかげだ。

俺のタトウーに刻まれている言葉はフランス陸軍のモットーだ

「輝くチャンスをくれ」

オリヴィエ・フラマン

L I O N

8月29日生誕

185cm

87kg

固有技能E E—O N E—D エマニユエルからもらったもので過去に何回も故障（弱体化）されている